

特

集

暮らしと自然と文化的景観

環境破壊の世紀から環境保全、環境再生の世紀に進んでおよそ20年。いまだ20世紀型の開発、都市計画も少なくないが、新たな方向性はすでにしめされ、さまざまな取り組みが行われている。そのなかで「文化的景観」は重要な概念である。この比較的新しい概念は、生物多様性と文化多様性の重なる領域や、人びとの暮らしなども関わる非常に複雑なものである。

地域政策研究センターでは、生物文化多様性、エコロジカル・デモクラシーなどの方面から国内外の報告者を得て、文化的景観を中心に据えた国際シンポジウムを開催した。本特集では、シンポジウムの内容を紹介する。

国際シンポジウム「暮らしと自然と文化的景観」報告

金沢大学人間科学系 助教 丸谷 耕太

金沢大学
教授
佐無田 光

国際シンポジウム主催校挨拶

当シンポジウムの主催校である金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センターでは、地域再生に関する政策研究と国際比較を多角的な方面から進め

ています。センターでは、昨年度より、日本学術振興会学術システム研究センターの委託を受けて、人文学的地域研究の国際的な学術研究動向調査を行っています。今年度は「文化的景観」に焦点を当てたシンポジウムを企画いたしました。

金沢大学では、地域創造学類に「観光学・文化継承コース」を開設する予定です。地域への眼差しは、観光をはじめ、成熟社会のニーズとして深化しています。なかでも「文化的景観」という概念は、

特集 暮らしと自然と文化的景観

■国際シンポジウム「暮らしと自然と文化的景観」報告

金沢大学人間科学系
助教 丸谷 耕太 …… ①

国際シンポジウム主催校挨拶

金沢大学
教授 佐無田 光 …… ①

The LIVING City: Systems and Infrastructures for Biocultural Diversity

ワシントン大学
准教授 Ken P. Yocom …… ②

The Cultural Landscape of Bologna between Conservation and Valorisation

ボローニャ大学
准教授 Valentina Orioli …… ⑤

金沢・能登に観るエコロジカル・デモクラシー

東京工業大学
准教授 土肥 真人 …… ⑧

総括

同志社大学
教授 佐々木 雅 幸 …… ⑪

■宮本文庫の整備から環境政策形成史研究へ

金沢大学経済学経営学系
教授 碓山 洋 …… ⑪

近年、地域の魅力を構成する重要な資源の1つとして、国内外で注目を集め、世界的に新たな地域政策の対象になってきました。

「文化的景観」という比較的新しい考え方は、景観という美的要素に加えて、生物多様性と文化多様性の重なる領域や、人の暮らしや生業の営みまでも関わっていて、非常に複雑です。ハードな景観整備の手法とは異なり、「文化的景観」をどう守り発展させていけばよいかという、学術的・政策的な枠組みは、いまだ確立されているとは言い難いと思いません。建築・都市計画的なアプローチに加えて、生態学、人文学、社会科学などの多面的な視点が必要になってきます。

今回は、このテーマの先進地であるイタリアの政策担当者やアメリカのランドスケープの研究者をお招きし、地元の事例を交えて議論します。この石川という地域には、伝統と創造の文化の息づく金沢という都市や、世界農業遺産に指定された能登の里山里海などがあり、「文化的景観」を発信するのにふさわしい地域です。国際比較の視点と地域の実態を踏まえつつ、実りある議論が展開されるのではないかと期待しております。

共催する関係諸機関におきましては、それぞれ、自然と社会のつながり、生物文化多様性、里山里海、コミュニティ、景観政策、「金沢らしさ」などに関する議論の積み重ねが行われてきました。このシンポジウムをきっかけに、地元の関係者と研究者の連携がますます深まり、当該テーマの議論を今後も継続していくためのプラットフォームの構築につなげていければと考えております。

ワシントン大学
准教授
Ken P. Yocom

The LIVING City: Systems and Infrastructures for Biocultural Diversity

1. 複雑な世界におけるデザイン —— エコロジカル・デザインと計画

私は2012年に「エコロジカル・デザイン」という本を出版しました。その中で重要な部分は「シス

テムの能力を拡張する明白な試みに携わる」ということです。エコロジカル・デザインの概念は現在におけるダイナミクスと過去の遺産を理解し、将来を推測することなのです。

チョンゲチョン(清溪川)の復元プロジェクトは、ソウル都心部にある文化的歴史的に重要な川の姿を取り戻すもので、約6 kmにわたり高速道路システム全体が取り外されました。これにより、都市中心部の生物多様性の増加と気温の低下という点で多くの効果が生じています。市街地の公共交通機関の利用者数にも影響を及ぼし、長期的にはこのエリアに接する土地利用を多様化させました。しかし、高速道路がなくなり端に住む多くの人々が他の場所に移動しなければならなかったという欠点もあります。また、元の川の流れは、暗渠化によりまちの下を流れる都市排水のために失われてしまいました。

シアトルのマグナソンパークの湿地はワシントン湖に囲まれた公園ですが、以前軍用飛行場でした。公的所有に転換されたとき、コミュニティの利益を特定して優先順位を付けることが大きな課題となりました。生態学的観点から見て重要な点の1つは湿地の開発です。完成以来、地元の生物多様性に利益をもたらし、植物、鳥、そして地域内で絶滅の危機にさらされているパシフィック・コーラス・フロッグが増加しました。また周辺の水質改善も見られました。この公園の課題は、敷地全体に散在している古い飛行場の汚染土壌などを含め、たくさんあります。財政的圧力のために汚染に直接対処するのではなく、デザインはそれらの領域を避けるように制約されていました。

これらの例は、エコロジカル・デザインとその終点を理解する上で重要であり、生物文化多様性を理解する上での土台であると考えます。持続的なプロジェクトに必要なすべての基準を満たすデザインはほぼ皆無ですが、エコシステムを効果的に再開する多様な戦略を通じて、敷地の状態と利用者の健康を改善できるデザインが多いということです。

デザインとは、価値をもたらす、それらの場所をプロセスとして理解し、そのプロセス内で取り組むことです。私が最も重要だと考えるのは、場所、時間、文化の違いをポジティブな価値として扱うことです。私は、問題の解決策を探索する「問題ベースのデザイン」よりも「機会ベースのデザイン」として捉えることを好みます。そして、自身のデザインの経験を通じて加えた項目は「諦めない」ということ

です。米国の規制の中では、成果を上げるのに本当に長い時間を要します。



図1 清溪川復元プロジェクト

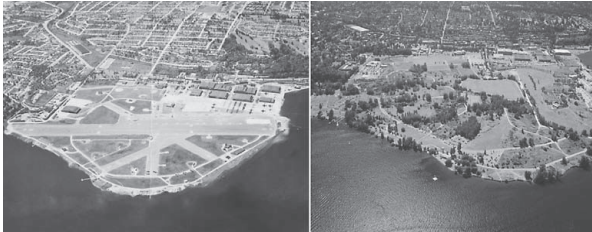


図2 マグナソンパーク

2. 都市へのスケーリング: エコロジカル・シティ vs. エコロジカル・メトロポリス

次に都市に合わせた拡張について論じます。エコロジカル・シティとは、都市を一つの要素として理解します。都市をモノとして見るのではなく、文脈の中で重なり合うプロセスの集合体として捉えます。したがって、環境、人、規制構造がどのように連携して都市に関わりあうかを探求します。エコロジカル・メトロポリスは都市の機能的統合に重点を置きます。

アブダビのマスタードール・シティでは2006年にエネルギー資源と輸送から完全に独立した都市をつくる構想が開始されました。周辺環境と切り離されたひとつの空間に包まれた都市というエコロジカル・シティの概念です。段階的に計画が前進するため、最終的な約6平方キロメートルのうち現在までに約0.5平方キロメートルが建設されました。

対照的なのは中国の天津市です。都市中心部を有毒な荒地の上に建築し、中国内の様々な都市生活の様式を再統合することがコンセプトです。つまり、都市生活空間と都市労働空間を、人が水と接するより自然な空間に統合するために空間を再分配しています。エコシティ・コンポーネントとグリーン・リビング・コンポーネントは、水や排水の流れ、そしてそれがメトロポリス地域の中でどのように動作するかを考慮しながら、エネルギーの流れ、輸送システムを概念的に捉えています。

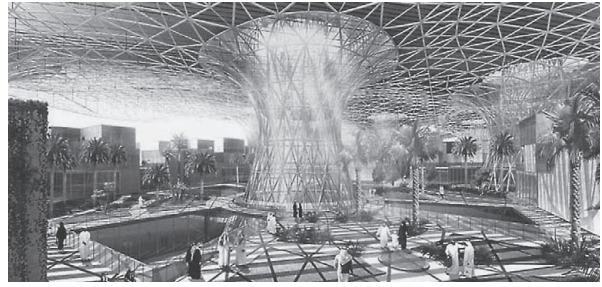


図3 マスタードール・シティ



図4 天津市

3. 特性: 都市の生物文化多様性

プロジェクトを詳細に考える時、私たちは都市構造と生き物の生態系の特性を探求し始めます。私はこれらの特性をシアトルの文脈の中に置きます。シアトルは都市生活、社会的平等、環境についての理想とアプローチにおいてとても進歩的な都市です。

コミュニティー・ベースの経済発展とは、複数のコミュニティが共通の経済問題の解決策を生み出すプロセスです。パイクレイスマーケットは住民と観光客ともに人気がある場所で、ダウンタウンの中心でありウォーターフロントを見渡す重要な場所です。1960年代に市はマーケットを閉鎖してこの敷地を再開発することを模索していました。複数の著名なコミュニティ活動家を中心に市民が抵抗し、マーケットの保全に成功しました。その一環として、効果的かつ地域的な経済発展を促進するトップダウンの組織とボトムアップのアクションとの多様な関係があります。様々な個々のコミュニティと協力して、人々に権限を与え、人々を採用し配置する方法がとられます。

ほとんどの大都市圏には、現在確立されたりサイクルプログラムがあります。都市が生み出す廃棄物の行き先や処理の方法を理解することは、問題ではなく資源と見ることができます。エネルギー源の変

更について、太陽エネルギーや再生可能エネルギーへの変更や技術や材料のリサイクルは一般に見過ごされがちです。

バイオリージョナリズムとは、その地域を構成する主な種が住む生物学的領域という概念です。シアトルにおけるカスカディア（カスケード山脈の領域）を生物学的領域として研究し理解することで、損傷した都市システムの修復方法を検討します。サーモンはその領域の主要な種ですが、他の種のほとんどはサーモンのライフサイクルに影響を受けています。シアトル市は、地域のサーモンの生息地を更生することによって、サーモンの集団を再確立する努力をしています。もう一つの非常に重要な要素は教育で、次世代や若者の支援をすることです。周囲に何があるかを認識し、都市の中だけではなくより大きな文脈の中で生活していることを認識するように子供たちを教育することです。

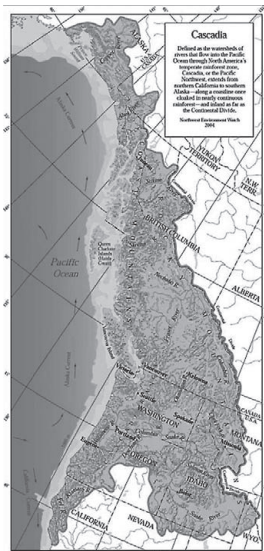


図5 カスカディア

プログラムは人々を家から外に誘い出し、土壌を成長させ、土壌を改善する方法を特定します。

もう一つの特性は適正な技術の使用で、技術とデザイン思考の最先端にいないとできないということです。持続的発展のためには最新技術を効果的に理解、開発、実装、活用する能力が必要です。ブリットセンターという建物は都市資源からまったく独立しており、すべての電気を生成し、使用する水を集め、使用した水を浄化します。すべてのシステムとそれを構築するために使用されたすべての材料は、シアトル周辺の地域から持ち込まれました。

これを理解するために建物のライフサイクルを考えます。材料の産地や材料の持続期間、再利用の方法はどうなっているのでしょうか？水はどのように集められ、使われ、処理されているのでしょうか？この建物で使用されているエネルギーはすべてその中で作られます。重要な点は、建物内で働く占有者の積極的な運営管理への参加です。建物は時間の経過とともに維持される必要があるのです。適切な技術の例はリサイクルに関連することですが、シアトル市には、家庭から有機材料を採取するコンポストプログラムがあります。市はそれを収集し、それを民間組織に販売します。民間組織は、有機材料をコンポスト化して土壌にし、それをコミュニティに売り戻すのです。適切な技術とか最先端とは、地域社会の中で機能しているかという点も重要なのです。



図6 ブリットセンター

持続的な都市開発とは、地域社会や生態学的ニーズを支えるイン

フラストラクチャの強化です。この例はレイン・ガーデンです。世界のほとんどの都市部は、レイン・ガーデンを考慮しています。もう一つの非常に重要な要素は歴史的保存です。必ずしも昔の姿を保存するというだけではなく、今日のニーズを満たしつつ、昔の姿の特徴や、その意図するところを保存することが重要なのです。そして最後は、非車両交通を促進するためのシステムの分析と開発、つまり、列車システム、歩行者システム、自転車システムがその中心です。

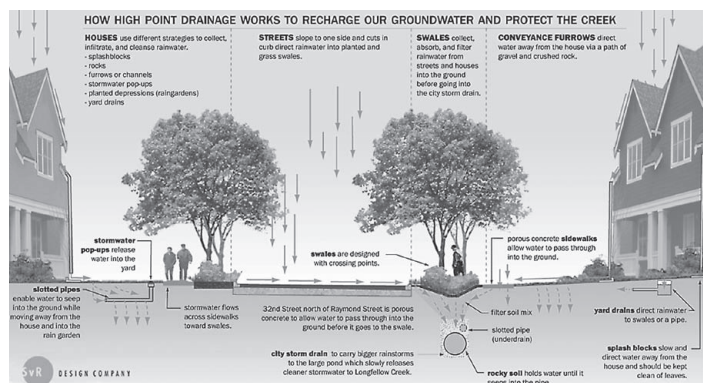


図7 レイン・ガーデン

社会的平等は非常に重要な特性です。さまざまなエコロジーとシステムを支援することは、多くの点

で私たち自身とその生活の促進に役立っているのです。人々が意見を述べる場所を提供し、人々にニーズを明確にしてもらう必要があります。財政的手段のより少ない人々はシアトル市内に住む余裕がありません。したがって、市は積極的により包括的な地域づくりのためのさまざまな方法と機会を探求し、すべての人々を巻き込む開発を行っています。社会的平等の一環として、人口のより生産的なセクターや構成要素を考えるだけでなく、子供や老人の健康を育み、社会正義の機会を創造し、皆のために機会を創造し改善することを考えます。

これらの異なる特性はすべて、生物文化多様性を創造します。それらはより生物多様性のある都市を作るためにうまく取り組んでいます。決して完璧ではありません。生物文化多様性とは何を意味するのかをより深く理解するために、引き続き取り組む必要があります。この対話には決して終点がありません。都市を理解し、場所を理解し、コミュニティを理解することです。ダイナミックで常に変化しています。それが、私たちがここで考えているものの中核的な原則です。ありがとうございました。

ボローニャ大学
准教授

Valentina Orioli

The Cultural Landscape of Bologna between Conservation and Valorisation

1. イタリアにおける文化的景観の概念についての考察

ボローニャの文化的景観と生物多様性について紹介するには、イタリア文化における「paessagio: 景観」という言葉の重要性に立ち戻らなければいけません。19世紀には、自然景観の考えから、絵画から抽出した美的経験の場として、ヨーロッパの伝統的な景観へのアプローチが指示されました。景観の概念は生態系という概念と緊密に関連していますが、同時に大きなスケールへの解釈にも関連します。大きなスケールによる自然景観については、遅くともローマ時代初期から環境に人の手が入り、自然景観は時を経るにつれ大きく変わりました。つまり、イタリアの景観はその地域に住む人による労働

作業の結果なのです。景観は自然なものというより文化の移り変わりの成果物と考えた方が適切です。

イタリアでは、大きなスケールや小さなスケールの両方の景観において、地理・形態学と生物文化多様性との関連性が強くうかがえます。大きなスケールの景観についてみると、イタリア北部のエミリア・ロマーニャ地方に位置するボローニャは「エミリア街道」という、ローマ人が紀元前187年に建設した街道沿いにあります。その全域はローマ人によって奪還され、入植者に土地を配分できるよう道路網や水路網を利用して分割されました。このチェントリアツィオーネ (centuriazione) と呼ばれるシステムは、エミリア・ロマーニャ地方の景観と都市移住のパターンの基礎となりました。

今日、アペニン山脈に存在する多くの森林は中世から移住した修道僧によって植えられました。都市の建築用材木を森林から供給しなければならなかったからです。一見自然に見えても、景観は人工的であり、人間の存在はとても濃いものなのです。生物多様性と文化多様性は表裏一体なのです。この密接な関連性は、地方の景観の中で構築された環境の物理形態と共にその環境に住む人々の生き方として表れます。それがその町や土地の最も色濃く、深いアイデンティティなのではないでしょうか。

2. ボローニャの文化的景観

ボローニャは39万人の人口を有する歴史的な都市で北に平地があり、南に丘や山があります。歴史的な中心地が様々な役割を担い、大都市としても地域的な規模としても魅力があるため、重要な拠点となっています。ボローニャはレーノ川とサヴェナ川の2本の川の上に位置しています。この2本の川が、衛生と防衛、製造、そして航行の目的で使われた運河のネットワークの支柱になっていきました。中世の自治体の権力者は、巨大な水門や水圧を利用した水車、洗濯場、貯水池、噴水などの人工物を利用することで、徐々に川を開発しました。60km以上つづく運河は19世紀以降に暗渠化されて現在は下水に使用されています。そのため見えなくなっていますが、今日でもボローニャは「水のまち」であると言えます。

ボローニャは地方の美しい風景を生み出している平野と丘の間にあるため、「農業のまち」であるとも考えられます。多くの市場や有名な食文化により、

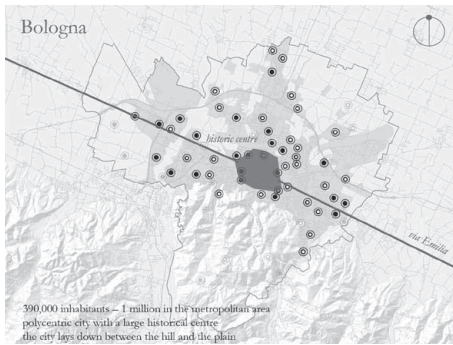


図1 ボローニャ

市内の農業の存在はとて力強く、手に取るように感じられます。F I C Oプロジェクトのおかげで、それ

はさらに現実味を帯びたものとなっています。F I C Oとは「イタリアの農家」という言葉の略語ですが、食べ物と農業のためのすばらしいテーマパークとなり、ボローニャだけでなく、周辺地域全体の食文化の価値向上に繋がることでしょう。我々は、年間600万人の観光客を予測しており、市の観光事業の強化にもなると考えています。

コミュニティ・ガーデンや都市菜園の存在にとっても、市内の農業は大切です。30haの菜園のうち殆どが公共ですが、私営のものもあり、社会的・環境的な重要な資源を代表しているといえます。地域の水の景観は、都市の緑樹栽培所や公園機関と共に、持続可能な移動、野外活動、観光産業を支持する緑と青のネットワークの支柱となっています。

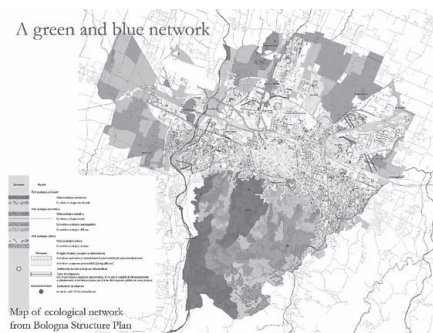


図2 エコロジカル・ネットワーク

さらに、ボローニャはイタリアの鉄道と道路網の重要な中心点であり、重要な中心都市です。年間700万人の乗客が利用する国際空港もあります。そのため、過去には商業の拠点や大学拠点として発展しました。ヨーロッパ最古の大学がボローニャにあるのも偶然ではないのです。今日のボローニャでは、毎年8万人以上の学生と200万人の観光客を迎えています。そのため、まちはとても生き生きとしていると同時に、特に歴史的中心地などの公共空間において、真の「消費」を生み出しているといえるでしょう。

3. 保護・保全・価値付け

文化的景観については、物理的要素だけではなく、社会経済制度や文化・学校制度、民間の伝統といった非物理要素についての深い知識も必要です。それらは活動の枠組みや政策の骨組みの土台となるからです。イタリアの憲法では景観は国の財産とみなされ、景観と文化的遺産に関する法律では範囲内の物理的要素が保護されています。政府や地方自治体によって保護されている領域や建築物は、地方計画の中ですべてマッピングされています。

遺産保護は保全、継続的な手入れ、もしくは修復をすることです。「修復」の分野はとて幅広く、様々な解釈の仕方があるでしょう。単なる清掃やメンテナンス、新たな建築物の導入、さらには建物の破壊された部分の修復には違いを区別するために異なる材料を使用することもあります。また法律では、修復や改修の際に地震対策が必要とされています。



図3 歴史的建造物の保全

遺産の適切な保全や価値づけのために民間の排水溝を遮断し新たな下水を作るという非常に複雑な計画に直面している水系が一例です。このような活動の中で、市当局はボローニャとフェッラーラを自転車専用道路で繋ぐべく、さらに広い領域で水系沿いの自転車専用道路の維持と推進に努めています。同時に、地方適応計画という気候変動に挑戦する計画もあり、市内の水循環の管理も試んでいます。このように、保護と強化政策そして価値付けのための政策はしばしば同時に遂行され、お互いに利益を与え合っているのです。

4. 歴史的中心地計画

文化的景観に関して最も関連性のある政策の一つは歴史中心地計画です。最初の歴史中心地計画は、歴史的中心地に対する保全のための決定が下された

1969年に遡ります。この段階では、計画家は住宅建築物に焦点を当てていました。物理的環境と都市景観を維持することが目的だったのです。車の交通の課題も関連してくるようになり、1967年の初の歩行者専用区域から1984年の交通計画にかけ車の交通量を削減する政策が強化され続けました。保全是建物の形状や外観に関心をおきますが、新たな内部構造には地震に対する耐久性を与えるものもあります。また、この考え方は、物理的だけでなく社会的でもありました。古代の都市と同じ人口を保つため、市当局は歴史中心地内の改良地区に低所得者と手工芸の活動をもりこみ、歴史的中心地に社会的住宅地区を作ったのです。

90年代の第二段階になると、保全と価値付けに関する政策が、住宅地区や住民施設から、大学や文化活動などの新たな拠点として国内外の人々誘致する新しい都市の建築へと移行しました。最も重要なのはマニファットゥーラ・デッラ・アルティ：以前タバコ製造会社と公営食肉処理場、そして博物館がある大きな公共の製パン所、公園、大学、など多くの文化施設があった広大な文化エリアです。この地域でもうひとつとても顕著なテーマは農業です。アースマーケットと呼ばれる重要なファーマーズ・マーケットが毎週開かれます。

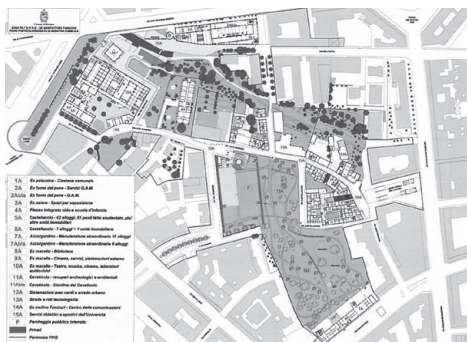


図4 マニファットゥーラ・デッラ・アルティ

2007年の新規地方自治構造計画を皮切りに始まった第三段階では、焦点が建築物から公共空間へと移行しました。特にエミリア街道沿いの歴史的集落と歴史的街道の公共空間の改善が進められました。2011年のディ・ヌオーヴォ・イン・チェントロ・プログラムでは、歩行者の都市利用を最優先することが確認されました。歴史的中心地へアクセスする車の台数が削減され、毎週末には、ウゴ・バッシ街道とインディペンデンザ街道という大きな二本の商業道に成形された「T地域」を暫定的に歩行者専用道路にするという「Tデー」が制定されたので

す。このようなプログラムを通して、市当局は多くの公共空間を改修する機会を得ています。歴史的中心地は以前より住みよく快適になりました。公共空間を快適にするためには緑がとても大切で、我々は緑化改善をすることにしました。市役所にあるコル

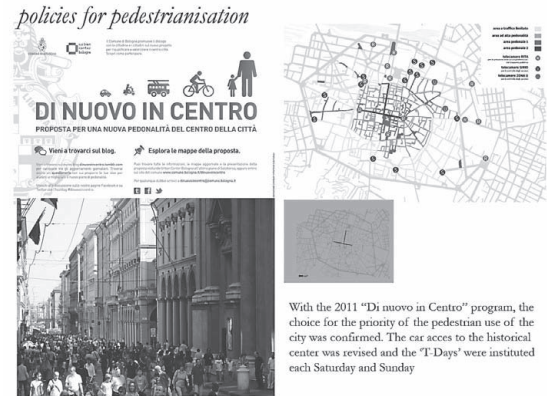


図5 ディ・ヌオーヴォ・イン・チェントロ・プログラム

ティエ・デル・ポッツは良い例のひとつです。

我々は力強い保全活動という観点から、歴史的中心地の「統合管理」という第四段階に入ろうとしています。すでに歴史的中心地が使い切られていることは認識しています。公共空間はそれを使用する人によっては、いさかきの領域だとみなされることもあります。住民は駐車場や静かな界限、施設を望んでいます。商業を営む人は、公共空間を市場やイベントのために使用したいと思っています。観光客は広い歩行者専用区域のあるバーやレストラン、テーブルやイベントが好ましいと思っています。集中して学生がいる場所は他の使用者が利用できなくしている場合もあります。それゆえに、市の文化的景観、特に歴史的中心地がそれであるためには、公共空間の変容と占有期間のためのルールを定義し、共有しなければなりません。

ボローニャでは通常、協力的手段や参加的手段がとられます。人々をシステムに向かわせるのではなく、我々は価値を人々に届けなければいけないのです。これが我々の政策の目標の一つです。今年5月から7月にかけて住民を含めて70回以上の公開集会を開き、我々の公共空間や歴史的中心地、色々な地区の新施設や他の事項に関する政策について議論をしました。我々が景観に対して取ってきたひとつひとつの活動——つまり物理的な面に限らず、個人個人の存在、人々の複雑な関わり合い、そして人間と環境の関係にも対応する活動——の本質を喚起させる課題、これが我々の現在の課題なのです。

東京工業大学
准教授
土肥 真人

金沢・能登に観る エコロジカル・デモクラシー

1. 自己紹介：エコデモ名刺

私たちはビジネスカードに対して、エコデモ名刺というものを作っています。表がエコロジー・サイドで、自分がどの川の近くに住んでいるかを示しています。裏面はデモクラシーサイドで、自分の住むまちの都市宣言や市民憲章から選んだ一節が載せてあります。市民としての自分の位置を示す名刺です。

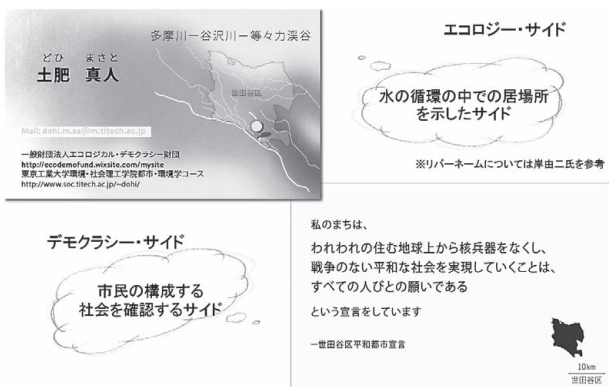


図1 エコデモ名刺

エコロジーサイドは分水嶺によるバイオリージョンの考え方に基づいています。海から水が蒸発して、雲になって、山に当たって雨になって落ちる。表面流は川になって、地下水は伏流し吹き出したりする。大きな水の循環が陸にもあり、その中のどこかに私たちはいます。私たちはその水を飲みます。野菜や動物を食べると、その水分が体の中に入って出ていきます。近代的な生活をしていても、私たちは水の循環の中にいるのです。

これは私が選んだ自分のまちの市民憲章です。世田谷区には、平和都市宣言、子ども・子育て応援都市宣言、健康都市宣言等々があります。この中から、平和都市宣言の中の冒頭の、「核兵器のない、戦争のない平和を実現していく」という一節を、自分のエコデモ名刺に入れました。私はこれを読んで、世田谷区民であることを誇りに思うのです。

2. エコロジカル・デモクラシーとは？

エコロジカル・デモクラシーについては Randolph Hester 氏の『Design for Ecological Democracy』という本に書かれています。私はこれを翻訳して、2018年4月に鹿島出版会から刊行されます。日本でも、自然と社会の連動を進めるために、昨年にエコロジカル・デモクラシー財団を設立しました。

自然と社会の両方を、その場所に根付くように一生懸命考えること、組み合わせることで、そして行動し、事態を動かして世界を構成し直す。自分の周りの世界も、世界中、文字どおり地球という意味でも、自然と社会の関係を再構成します。活動、実践されている方法、生み出されている価値、それを支える根拠、思想を、全部エコロジカル・デモクラシーと呼びます。「自然を直そうとすると、同時に社会が治る。社会を直そうとすると、自然が治る。」最近一番伝わるなと思う言葉がこれです。例えば間伐をしなければいけない森に入るときに市民参加でやる。すると、市民は森のサイクルを知り、生物を知り、水の循環を知り、林業も知ることになります。一緒に活動すると友達もでき、交流が始まるかもしれません。このようなことはそこら中であって、非常に重要なことだというのが、エコロジカル・デモクラシーの考え方です。

民主主義は一人一人の自由を保障できる唯一の政治体制です。しかし行き過ぎて無制限の自由になると、孤立やエゴ、無責任を引き起こします。それに対して、私たちは自然の一部であり社会の一部であることを知る事で対抗できるのではないのでしょうか。私たちはどこかの水を飲み、どこかの町に住んでいます。隣の人と支え合って生きています。これを知り暮らしに組み込むことが、個人の責任ある自由をさらに進め、喜びを増し、社会と自然を持続可能にするために必要だと、エコデモは教えてくれます。見る目を持ってみると、どこでもかしこでもエコデモが見えるということです。エコデモは、ここでも、そこでも、どこでも、どこにでも、いつでも、誰でも、なんだと思っています。

3. 金沢・能登でエコデモを探す

今回のエクスカージョンに用意した道具が、エコデモ発見シート(エコロジカル・デモクラシー発見シート)です。項目にそれぞれ「文化多様性」「ランドスケープ」「生物多様性」と書いてあります。訪問先で見えたもの、聞いたことを、ここに分類して書いてい

きます。その場所に行ってみても意外と何も見えていません。活動されている方に話を聞いて、エコデモと一緒に発見してもらおうのです。例えば、何か社会のことに気が付けば書き、見えた風景をランドスケープの欄に記す。そして両者の間に何か関係があるのではないかと、さらに社会やランドスケープに対応する自然の事象はないかと探してみます。そうすると新たな発見があります。どう考えても思い付かない場合は、実際に何かを付け足せばいいのではないかと考える。そのような思考のための道具です。



図2 エコデモ発見シート

今回は能登の3カ所を26名の方と、金沢の3カ所を18名の方と一緒に回り、情報の詰まった90枚のエコデモ発見シートが手元にあります。今日の発表までにこれをきれいにまとめるのは無理でした。エコデモの発見は、皆さんの90枚を並べてみて、自然と社会とランドスケープを結ぶ回路を見ていきます。そして見つかった回路をもう一度、事業を展開している人と一緒に、その事業の中にエコデモを発見するのが基本です。ですから、これからご説明するのはエコデモ発見の途中です。

1カ所だけ話してみます。Juanさんが紹介してくれた、卯辰山の山麓の伝建地区の心蓮社というお寺と庭の話です。例えば「Juanさんが、あの庭に行って縁側に座っていると、何時間でもそこに座っていると、時間が過ぎるのを忘れてずっといられると言っていた」、「庭はやさしく穏やかで、Juanさんと自然との境界となり、自然の入り口になっているのではないかと、庭というランドスケープが入り口になっているのではないかと書かれています。庭は本当に美しい風景で、光が水面に当たってアメンボが動くときらきら水面が動くのです。リフレクションの光が石灯籠に当たって映っています。時間がた

つと、今度はタブの木の幹にも映って、きらきらする。奇跡のような自然の美しさを見る人が自然と一体となる瞬間であり、庭が自然の入り口であり、同時に自分への入り口でもあるだろうと気が付きます。別のシートでは、「Juanさんが光を感じている。Kennethさんも Orioliさんもずっと見ている。だから、文化の違いを超えて庭と水面と光の反射は自然への入り口になる」と書かれました。東京から来た者も、若い学生も、みんな見とれているランドスケープがある。文化の多様性を超えた自然への合一点が風景に現れているという発見です。



図3 心蓮社



図4 心蓮社の庭園

今回の心蓮社の庭のエコデモ発見では、社会—ランドスケープ—自然の関係は、三つにまとめられました。池は心字池といって、「心」という漢字をかたどっています。自然そのものには心はないのだけでも、人がそこに心を入れることで、自然に文化が入っていきます。そして山の上からは常に自然の側が、庭を自然に戻そうとします。人間はそれをメンテナンスすることで、自然の入り口を維持し続けようとしています。ですから、自然と人間の文化のせめぎ合いと言ってもいいし、両方もが重なっている場所だとも言えると思います。

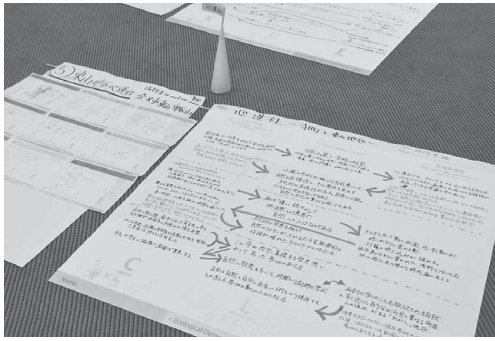


図5 エコデモ発見(心蓮社)

ここには素晴らしいエコロジカルな社会、文化とエコロジーの接点があります。それだけだと「なるほどね」です。心蓮社は東山の麓にあって水が湧き出しています。後ろは山の名所で浅野川を挟んで寺を置くという、おそらく政治的な力でできた寺町です。ですが、心蓮社が自然の入り口ならば、そこにたくさんあるお寺はすべてそうなのではないでしょうか。寺町の全体は、自然がまちに出てきているところで、逆に文化が自然の中へ出ていくところでもあり、自然と自分と合一するポテンシャルが発揮される場所ではないかと思います。

一方、観光地化された東山はとても自然との接点とは思えないし、社会との接点ともなかなか思えません。私ならば、庭を通してそこには自然が来ている、われわれ人間の文化が重なる、ポテンシャルが非常に高い場所として位置付け直すと思います。お寺は開いていないから入ったことはないけれども素晴らしいところがきっとたくさんあるのでしょう。そして庭々とそこに至るまでの東山地区なども位置付け直してみたらどうだろうと思います。

文化の多様性という意味では、お寺の格天井に絵があるのですが、これもいろいろな市民の方が描いたそうです。真ん中は九谷の絵付けのすごい人が描いたと聞きました。真ん中には素晴らしいランドスケープとしての庭があります。コケがむしたり、モリアオガエルが来て卵を産んだり、そういうことが繰り返して起こっています。そのような風景が自分への入り口になり、僕たちは自然と合一し、そういう場所だと知るのでしょう。

4. 生物・文化的多様性とランドスケープ： エコデモ発見シートから

一般に生物多様性と言えば、エコデモ発見シートの自然の欄だけの話です。どれほどの生物がこの範

囲にいるのか、それから社会・文化の欄をみて、どれだけ多様性があるのか、別々に話してします。しかし自然と文化が一つであって、分けることがもともと考えられません。ですから、生物文化多様性あるいは景観の多様性というのは、ランドスケープを媒介にしたセットとして多様なのです。ある場所の自然と文化のつながり方は別の場所のそれとは違うし、ランドスケープとのつながり方も違うというのが、私が思う生物文化多様性です。結構革命的な、画期的なことで、場所に根付かせて、自然と文化を考えてみるということ、これはグローバリズムや物や情報や人が移動を自由にする社会の中で、どのように社会全体を、世界全体を再構成するのかという大きな問題の一部なのです。

もう一つ、例えば金沢の真ん中でのクリエイティブツーリズムでのエコデモ発見シートに、エコロジーがあまり書かれませんでした。「これは、どうしてだろう。この欄には何もなくていいのかな。いやいや、あるとしたら、何がどのようにありえるだろう」と考えることは実り豊かなことを生み出すはずで、それがエコロジカル・デモクラシーの方法であり思想なのだ、私は言いたいのです。発見される一つひとつの事象が素晴らしいのだから、どんどん発見しなければいけないし、でももしも自然と文化が連動していなければ、それを直し治す方法を考えるのがエコデモなのです。エコロジーと社会の関係をみんなで考える、そんなデモクラシーが実践できるのです。

エコロジーとデモクラシーが、両方とも場所に根付くように考えて、組み合わせ、動かして、世界を再構成する活動、方法、価値、思想。それらは、ただ情報を集めてアーカイブするものではなく、誇りにすべきことです。美しい社会関係と美しい自然との関係、必ずしも私たちには美しく見えないかもしれませんが、それが美しいランドスケープを生んでいるとすれば、そこには学ばねばならない「何か」があるのです。エコロジカル・デモクラシーは本当にそこら中にありますし、それが持っている可能性を確認できるのです。



同志社大学
教授
佐々木 雅 幸

総 括

私は 1985 年から 2000 年まで金沢大学におりました。バブル経済がひどくなり全国的に乱開発が進んだ時期で、石川県内にもゴルフ場が 10 ぐらい新たに造られるという話がありました。日本のゴルフ場では大量に農薬をまくため、あちこちで反対運動が起きました。

一番有名なのは手取川の水源の上にゴルフ場を造るという白山麓ゴルフ場騒動でした。水道水に影響が出るため、作家の高橋治さんと一緒に止めました。輪島の三井地区の中に造るという話もありました。輪島市議会で賛成派・反対派が議論することになり、賛成派を論破しました。三井地区で、今日お話が出たような集落の小規模な自然との循環の維持は、そういう流れの中で出てきたものです。今年の秋に奥能登国際芸術祭が展開されます。そこも原子力発電所の 2 機目ができる話がありました。石川県は電力が余っていますが、トヨタ自動車に送るための電力という口実でした。一緒になって止めましたが、地元の建設業者の仕事もいるので、セカンドベストとして能登空港を先に造りました。

エコロジーや環境問題を考えるときは止めるべきものを止めないといけません。輪島の産業廃棄物問題は、小規模な地域の中で循環しているゴミを処理する話ではなく、広域的にゴミを集めてきて処理する施設です。それを地元の方や市長が中心になって誘致せざるを得ない状況に追い込まれている点が問題です。やはり、環境と環境資源と文化資源を生かした地域の内発型産業を発展させなければ、大規模で都会が嫌がる施設を持ってこなければいけません。

内発的発展のモデルとしてポローニャの比較研究がありました。ポローニャは都市景観の取り組みも素晴らしいし、職人企業のネットワーク型の産業組織も素晴らしいし、ソーシャル・キャピタルの中心地です。経済と景観と社会が一体となっていて、それをコムーネがコントロールしています。つまり、地方自治がしっかりしているのです。Orioli さんの話で、最終的に住民の意志をまとめて一体的な構想を持たなければいけない、生物多様性や文化多様性をまとめるときには、それが地方自治なのだと思

います。エコデモというのは、まさにそういうものだと思うのです。

当時は地域の持続的発展と工芸の推進をテーマに研究していました。この地域を代表するものが、手仕事であり工芸だからです。生物多様性と文化多様性は、さまざまな工芸・手仕事によって媒介されますので、この二つのものが生活の中にもつながっていくと考えたわけです。ユネスコ創造都市を進める上で、ポローニャに視察に市長を連れていきました。いろいろなアイデアが出てきました。その前に取り組んだのは世界工芸都市会議です。以降、私は工芸というものを、フォーディズムや大量生産・大量消費の社会の後に来る、より新しい文化的な生産、あるいはネオクラフトイズムと考えています。

現在、金沢市は新しい工芸として「工芸未来派」というのを 21 世紀美術館で取り組んでいます。工芸館の東京からの移転について知事もそれでいきましょうと言っています。この地域では、手仕事・工芸を媒介にした、その上に文化的景観が乗ると私は思うのです。そして生物多様性、文化多様性の世界的なモデル地域になることを、今後の研究課題として、皆さんに期待しております。どうもありがとうございました。

金沢大学経済学経営学系
教授
碓 山 洋

宮本文庫の整備から 環境政策形成史研究へ

地域政策研究センターでは、2017 年度から 3 年間、碓山を研究代表者として「宮本憲一氏収集資料を活用した環境政策形成史に関する研究」をテーマに科学研究費補助金を獲得した。本研究は、①宮本文庫（金沢大学中央図書館）に宮本氏から追加寄贈された図書・資料の分類とデータベース化、②寄贈図書・資料を活用した研究の二本の柱からなっている。

1. 図書・資料の整理、データベース化について

7 月 30 日、宮本氏ご本人の全著書を含む図書・資料が図書館に搬入された。氏の著書については、他の図書とは区別して、文庫のはじめに独自の書架

を設ける予定である。その後、8月10・11日に科研研究会（後述）に出席した研究分担者で書庫を視察し、資料の整理・データベース化の方法について意見交換を行った。図書館の伝統的な整理・データベース化の方法では必ずしも研究者にとって利用しやすいものではないこともあり、図書館のデータベースと並行して独自のデータベースを構築することなどが提案された。

宮本文庫の現在の状況であるが、図書については、今回搬入分以前の約7,600点についてはすでに貸出可能な状態である。資料については、中分類したものをファイルボックスおよそ300箱に収納している状態であるが、データベース化が未着手のため、残念ながらまだ閲覧できない状況である。（資料については、閲覧のみで、貸出ししない予定。）なお、資料のうち冊子体のもので約3千点は、専門業者に委託してデータベース化し、来年度はじめには閲覧可能となる予定である。

今後であるが、第一に、冊子体以外の資料の整理・データベース化の方法の開発が急がれる。多くの資料を収蔵されている「あおぞら財団」（公害地域再生センター）などからノウハウを学ぶことにしている。第二は、つぎの資金の獲得が課題となっている。今回の科研費は3年間で1,260万円と一応の大きな額ではあるが、膨大な宮本氏収集資料をすべて整理しデータベース化するにはまだ不足することが予想される。あらたな資金獲得のためにも、本研究の成功裏の進展が求められている。

2. 環境政策形成史に関する研究について

8月10日、11日の二日間、金沢で第一回の研究会が開催された。宮本憲一氏と研究分担者16名のうち14名が出席した。4名が研究報告を行い、最後に宮本氏が総括コメントを行うという形がとられた。

第一報告——寺西俊一教授（帝京大学）

寺西氏は、「戦後日本の公害・環境問題研究と“宮本経済学”の意義」と題して報告を行った。自らの公害・環境問題への接近と宮本氏から受

けた学問的影響から始まり、戦後日本（とくに高度経済成長期）の公害・環境問題を振り返りながら、“宮本経済学”にみる思想・理論・政策論の総合体系とその意義が論じられた。

第二報告——佐無田光教授（金沢大学）

佐無田氏の報告タイトルは「宮本経済学から地域政策研究への示唆」である。宮本経済学とSustainability研究について、①批判理論としての意義、②「外部性」（共同社会的条件）の経済学、③システム（体制）転換の政策論、④地域からのオルタナティブの四つの側面から論じた。そのうえで、21世紀の地域政策研究に向けて、ポスト福祉国家の社会統合アプローチや、再帰的近代化論への反批判が論じられた。

第三報告——土井妙子教授（金沢大学）

土井氏は、「沈黙する福島」とのタイトルで、豊富な写真をつかひながら、正確な汚染地図さえない福島の現状について報告した。公害問題の歴史は「地元ボスとの闘いだっただ」としたうえで、福島に関するマスコミの情報量が少ないことなどを問題とした。チェルノブイリと福島を比較し、事故後の補償、汚染回避対策に関しては、旧ソ連圏国家のほうがよい状況でさえあるとされた。

第四報告——大久保規子教授（大阪大学）

大久保氏の報告タイトルは、「日本の環境法における市民・NGOの位置づけ——その展開と課題」である。参加原則の国際的展開がリオ第10原則から説き起こされ、環境基本法の制定と協働の法定の意義が明らかにされた。ついで、情報公開と行政決定への市民・NGOの参加、司法アクセスについて論じ、日本の特徴と課題がしめされた。

本研究は緒についたばかりであり、宮本文庫の整備とあわせ、これからの展開が重要である。研究組織外から講師を招いた研究会を開くなどの工夫も行って、前進を期したい。

地域経済ニューズレター第111号

2018年2月9日発行

発行／金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター 金沢市角間町（☎920-1192）☎（076）264-5438

編集／地域政策研究ニューズレター編集委員（碓山洋、菊地直樹）

印刷所／金沢市中村町28-14（株）谷印刷 ☎076-242-7267